九龍塞城の霧

胡　仁斐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

九龍塞城の霧

【Ｎコード】

Ｎ１１１４Ｘ

【作者名】

胡　仁斐

【あらすじ】

清朝の高官、林則徐と仙女、霞茘が清を守る為に奮闘する歴史ファンタジーです。

序章（前書き）

フィクションです。実際の事件団体とは一切関係ありません。

序章

重厚な屋敷の一室にその女は居た。

きらびやかな彫り物が施された柔らかい別珍のソファに腰掛け、透ける様な白い四肢をチャイナドレスから伸ばしている。顔はその四肢の持ち主である事を示すかの様な絶世の美女。長く艶やかな黒髪をきゅっと一纏めにし、大きな房の付いた耳飾りは、彼女が動くたびに優雅に揺れた。

部屋の端にあるドアの更に一つか二つ向こうでは、今、坂本龍馬なる男が、グラバーに長州への援助を求め説得に来ている。

恐らくこのままではグラバーは首を縦には振らないだろう。幕府に目を付けられては商売に悪影響だ。

「ふむ…」

一寸、考え込む様な仕草を見せると、女はソファに背を預ける。問題はない、とでも言いたそうな余裕の顔つきで、目を閉じた。

ここに自分が到着し、そして使いの者がそれを主人に報せに行き、それを聞いた主人が興奮して自分の前に現れる。安易に想像出来ることだが彼女にはそれが現実の映像として見える。

千里眼と言うのが近いだろうか。だから、部屋が幾つも離れたところで行われている坂本龍馬とグラバーとのやり取りもその目には映っていた。

そして先の映像通りこの屋敷の主、トーマス・グラバーは顔を紅潮させこの部屋のドアを勢いよく開いた。

「ミス・霞荔（ハーレイ）！」

グラバーは大股で女に歩み寄ると立て膝をつき、霞荔と呼ばれたこの女の手を取った。

「今日もお美しい」

女は満足そうにグラバーに笑いかける。それだけでグラバーは卒倒しそうだ。

「世辞はいい」

グラバーから自分の手を取り返すと霞荔は静かに立ち上がる。

「今日は老からの伝言を届けに来た。土佐の坂本龍馬が来てるであろう？」

「え…ええ。あの藩の者は唐突に現れて、無理を言い困っていたところで…」

「老はその坂本龍馬に従って薩摩と長州に加勢しろとの事だ」

グラバーの顔つきが変わる。何を言われたか一瞬判らないと言った風だ。

「確かに伝えたぞ。では息災でな」

霞荔は無駄のない動きで扉の方へ向かうとさっさと部屋を出て行ってしまい、残されたグラバーは呆然と立ち尽くしたが、はっと我に返るとすかさず霞荔の後を追う。

「待って下さい！ミス・霞荔！今夜食事でも…」

言いかけて霞荔が出て行った扉を開けたが、既に女の姿はなくその毒性の強い残りがだけが廊下を漂っていた。

第一章

霞茘は長崎の小高い坂の上に立っていた。その姿は先刻、グラバー邸を訪れた時のそれとはまったく違い、まるで天女か古代中国宮廷女官の様な姿であった。

ふと空を見上げるとゆっくり口笛を吹く。

一陣の風が巻き起こったかと思えば白い虎が霞茘の前に姿を現した。

「待たせたな、風。さぁ、主の元へ妾を運んでおくれ」

白虎は霞茘を乗せると空を駆け抜けた。

雲を抜け風を切り、たどり着いたのは広東と呼ばれている土地の九龍塞城上空。塞と言ってもさほど大きな規模ではなく、城壁の内側に建物がいくつか連なっている程度である。

霞茘は白虎から降りると塞の東寄りにある天后廟へと入って行った。

上空から見れば大した空間では無いはずだが、そこには無とも言う回廊が在る様に霞茘の足は暫く地面を踏む。

暗い回廊の奥、ひんやりとした空気の中にその扉はあった。重い銅の扉。霞茘がその前に立てば、まるで待っていたかの様に勝手に扉は開く。

金切り声にも似た様な音を立てて扉は開かれ、何も無い空間の真ん中に、だたぽつんと、格子に囲まれたベッドとそこから生えている様な木がたたずんでいた。

「調子は如何か？」

霞荔はベッドの前まで歩み寄るとそう、切り出した。

ぎしぎしと音を立てて何かが動く。

「…何が…調子は如何か…だ」

人が、ベッドの中でうごめいた。

その身体はまるでミイラに似ていた。

彼の身体はその後ろから生えた木が根を生やし自由に身動きすら取れない。動くたびに身体に張り付いた根がきしみ音を立てるのだ。

「このような身体にした張本人が…」

恨みがましい目で霞荔を見やる。年は老年。木に取り付かれている様な風体から実際の年齢は読み取れないが、かなり衰弱している様子が見える。

「何を言う。その身体を望んだのはお前ではないか」

霞荔は目を細め語り始めた。

「あの日、あの場所で全てを捨ててでも、願いを叶えたいと、妄に

すがったのは誰でもないお前だ」

くっと含んだ様な笑いを浮かべると霞茘はその男の名を口にした。

「のう…、林則徐」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1114x/

九龍塞城の霧

2011年10月9日15時26分発行